釧路地方におけるオオジシギ生息地市民調査報告
～姉妹湿地提携を契機とした市民参加型（シチズンサイエンス）調査の取り組み～

釧路国際ウェットランドセンター　技術委員会

要旨

本市民調査は、渡り鳥であるオオジシギの生息地環境保全を目的として実施した。かつて、旧釧路西高校の生徒が行ったオオジシギ調査が、オーストラリア政府関係者の目に留まり、釧路地方のラムサール条約登録湿地とオーストラリアのハンター河口湿地の姉妹湿地提携へと発展した背景を踏まえ、企画された。

2026 年度においては、4 月に事前説明会を実施し、事前申込人数 54 名を大きく上回る 79 名の市民が従事し、計 886 件の貴重な報告が寄せられた。

本報告では、調査データの分析結果を提示するとともに、オーストラリアの技術者との意見交換等を通じた国際協力の深化、そして次年度以降の継続的なモニタリングに向けた展望について述べる。

1. はじめに（調査の背景と目的）

1.1. 調査の背景

釧路地方は豊かな湿地環境を有し、多くの渡り鳥の重要な中継地・繁殖地となっている。中でもオオジシギ *Gallinago hardwickii* は、日本、特に北海道を主要な繁殖地とし、秋には数千キロ離れたオーストラリア東部へと渡ることが明らかになっている[*1]。しかし近年、オオジシギは世界的にその生息が危ぶまれており、国内においては、環境省のレッドリストで準絶滅危惧に指定されている[*2]。さらに国際的にも、急激に個体数が減少したという理由から、2022 年に国際自然保護連合（以下 IUCN）のレッドリストにおいて、カテゴリーが低懸念から準絶滅危惧へとランクアップされた[*3]。

このような背景の中、旧釧路西高校の生徒たちによる熱心な調査活動を契機としたオーストラリア・ハンター河口湿地との「姉妹湿地提携」の歴史を持つ釧路地方において、本種の保全に向けた取り組みとして、2024 年に当センター理事長らが訪豪し、技術者と意見交換を行い、オオジシギを保全するため今後積極的にオオジシギの生息状況について相互に情報交換を行っていくことを確認した。

1.2. 調査の目的

オオジシギをはじめとする渡り鳥の生息環境を守るためには、地域住民の興味関心の向上が不可欠である。釧路地方では、2023 年に日本野鳥の会釧路支部が中心となり、釧路湿原南部地域の個体数調査を実施したが、大規模な市民参加型の調査は実施されていない。そこで今回、オオジシギの当該地域における生息地を、市民の視聴確認を通じて把握しつつ、渡り鳥保護の意義について、市民の意識の啓発に寄与することを目的として、「市民参加型オオジシギ生息地調査」を実施した。

2. 調査概要および方法

2.1. 調査対象地域

釧路管内の４つのラムサール条約登録湿地の所管地
（釧路市、釧路町、標茶町、浜中町、厚岸町、鶴居村）

2.2. 調査体制

2026 年 2 月 2 日から 3 月 19 日まで、ロゴフォームやチラシ、広報誌を活用し広く市民に調査員を募り、応募があった 54 名を対象に 4 月 18 日に事前説明会を実施した。説明会には 30 名が参加した。

事前参加申込者 54 名のうち、実際に調査に従事頂いた方の割合は 44%だが、事前参加申し込みをせず直接調査フォームに投稿いただいた調査員が 55 名いたため、最終的に事前参加申込人数の約 1.5 倍となる 79 名の市民が調査に従事した。

2.3. 調査および関連事業のスケジュール

本プロジェクトは、データの収集のみにとどまらず、専門家による検証や国際交流、市民への還元を含め、以下のような年間スケジュールで実施した。

4 月 18 日：	事前説明会（調査方法や識別方法のレクチャー）
4 月 19 日 ～ 6 月 30 日：	市民参加型調査の実施（オオジシギの飛来・繁殖期）
7 月 24 日：	技術委員会検討会（集まった報告データの検証・評価）
11 月 26 日：	オーストラリアの技術者との意見交換 （日豪間でのデータ共有と保全に関する議論）
令和 9 年 4 月中旬：	令和 8 年度調査結果および令和 9 年度調査方法説明会

2.4. 調査・報告方法

本調査専用のフォームを用いて、位置情報サービスをオンにしたスマートフォンにオオジシギの目撃情報を入力し報告することとした。オオジシギのディスプレイ飛行または鳴き声を確認した目撃日時、確認個体の状態（姿のみ、鳴き声のみ、両方）、位置情報、調査員の連絡先を必須入力の記録フォーマットとした。任意の入力項目として、確認個体または地点の風景の写真、調査員の氏名、羽数や行動とした。

3. 調査結果

本調査期間中に、79 名の調査従事者から合計 886 件もの報告が寄せられた。

3.1. 時期別の確認状況

1. 時期別の報告件数推移

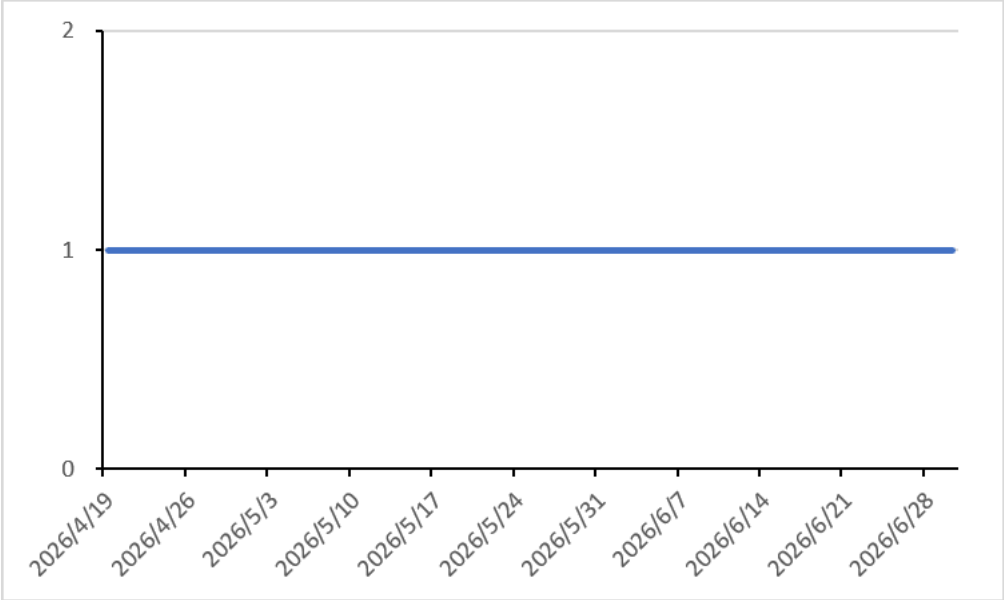

図 1. 日別報告件数の有無

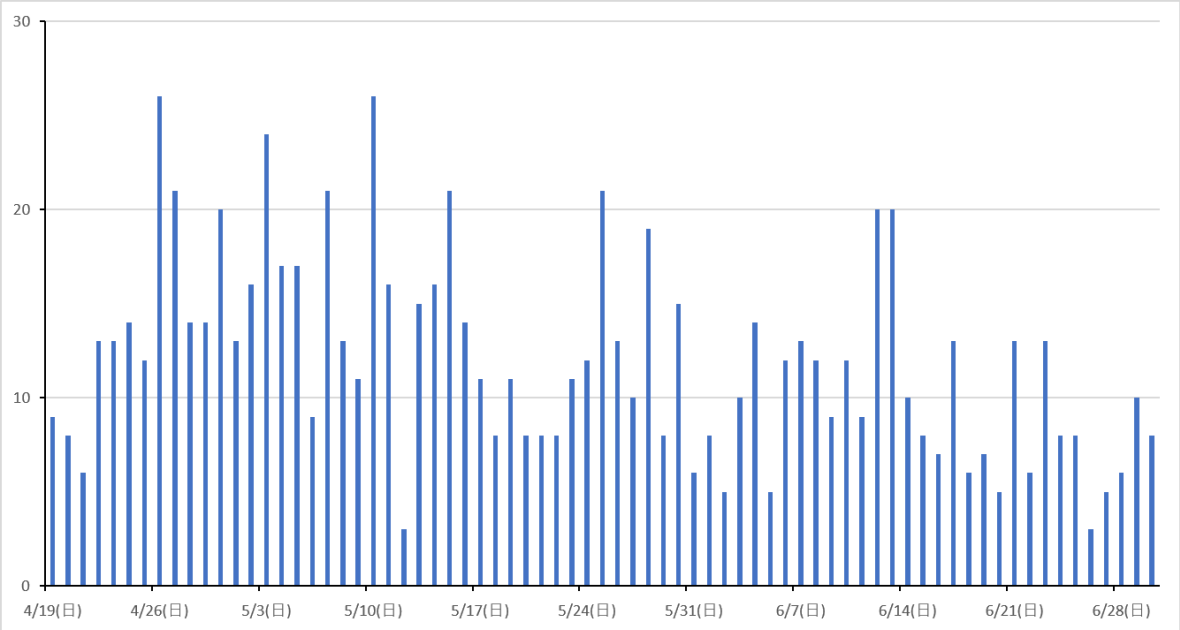

図 2. 日別報告件数の推移

調査期間全日程において、報告があった。（図 1）
報告件数は 4 月下旬から増加し、5 月にピークをむかえ、6 月にかけて漸減していった。（図 2）

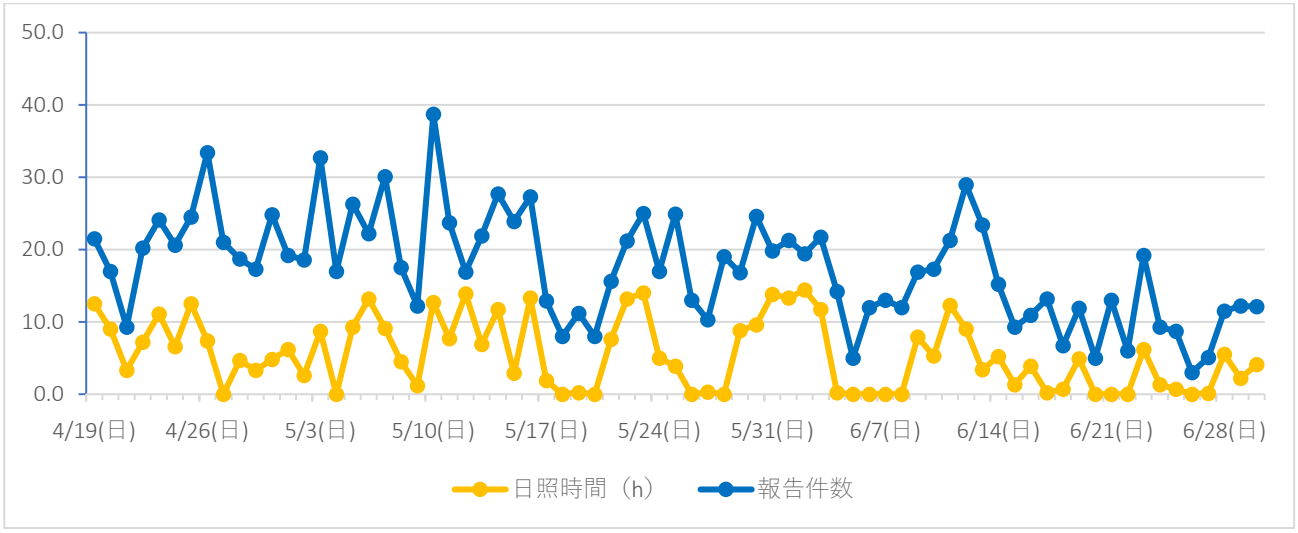

図 3. 時期別報告件数と日照時間の関係

図 3 から、日照時間が長い日に報告件数が増加する傾向が認められる。

2. 時間帯別の報告件数傾向

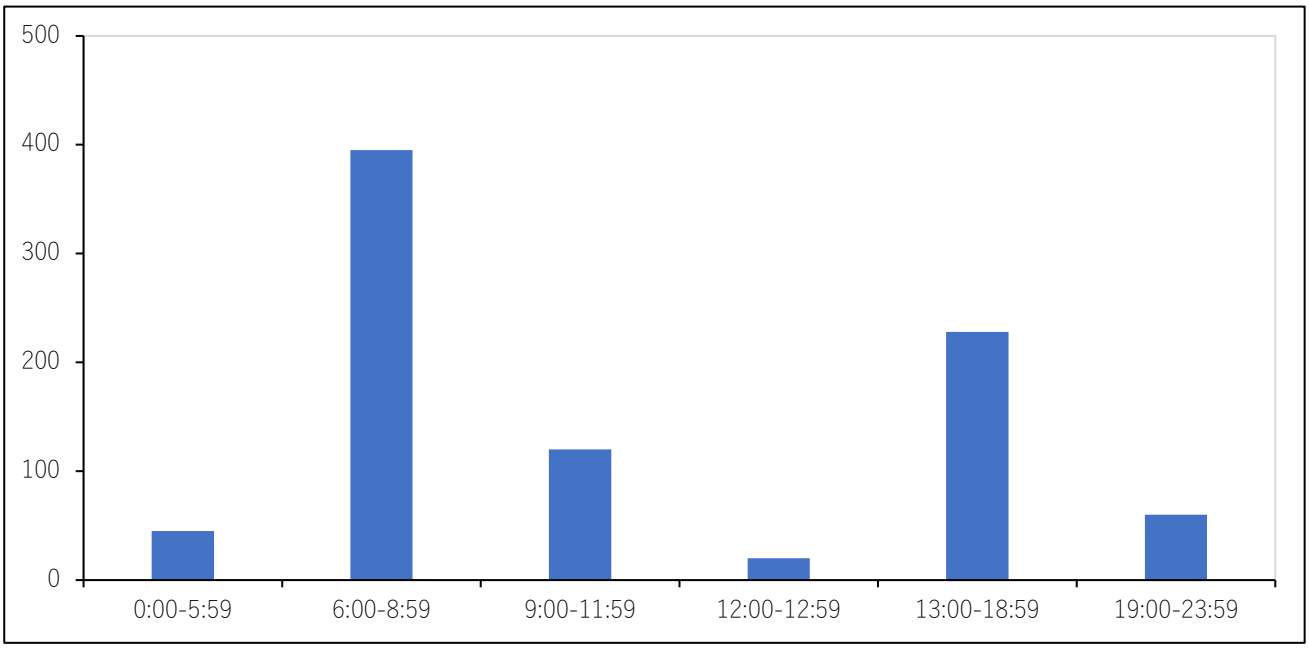

図 4. 時間帯別の報告件数推移

図 4 から、全体の報告件数の約半数が朝の 6 時～8 時台（特に 7 時台）に集中していた。

3.2. 地域別の生息傾向

1. 釧路湿原国立公園周辺における生息傾向

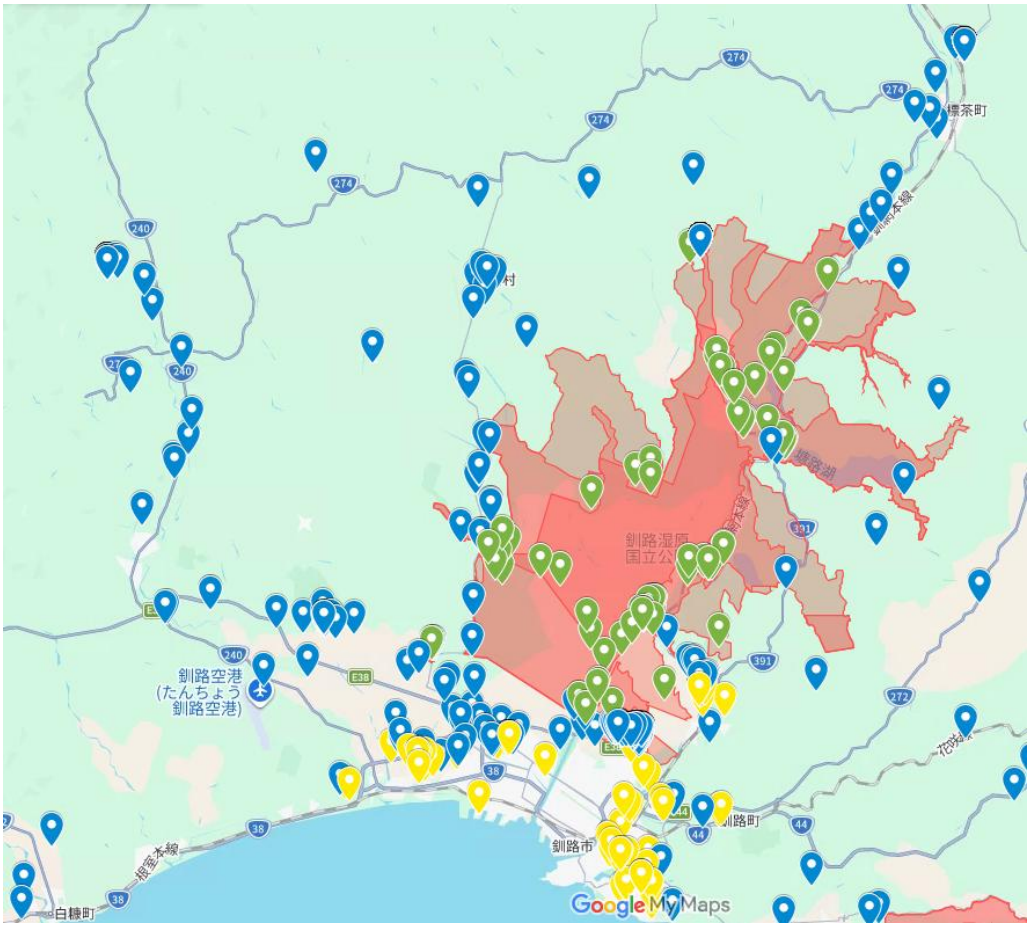

図 5. 2026 年度釧路湿原国立公園周辺におけるオオジシギ生息確認マップ
（青:郊外、黄:住宅、緑:保護区域の報告箇所を、赤レイヤは国立公園エリアを指す）

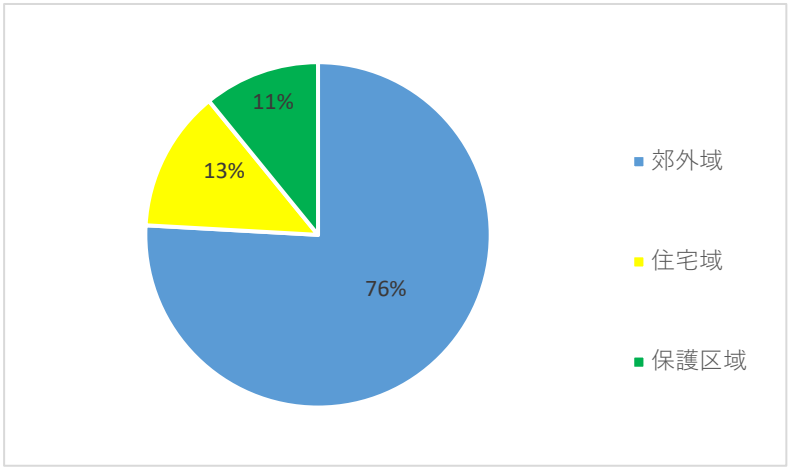

図 6. 釧路市・釧路町・標茶町・鶴居村における全報告件数の生息環境ごとの分類

図 5，6 より、釧路湿原国立公園周辺では、全体のほぼ 4 分の 3 は郊外域での報告であった。

2. 厚岸霧多布昆布森国定公園周辺における生息傾向

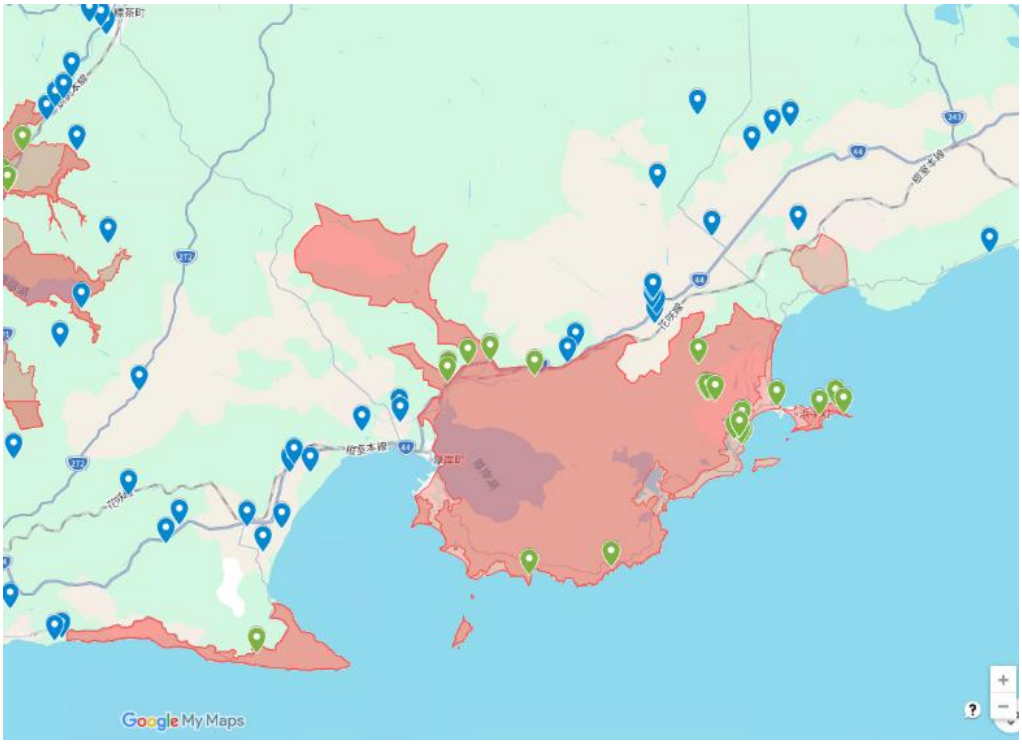

図 7. 2026 年度厚岸霧多布昆布森国定公園周辺におけるオオジシギ生息確認マップ
（青:郊外、黄:住宅、緑:保護区域の報告箇所を、赤レイヤは国定公園エリアを指す）

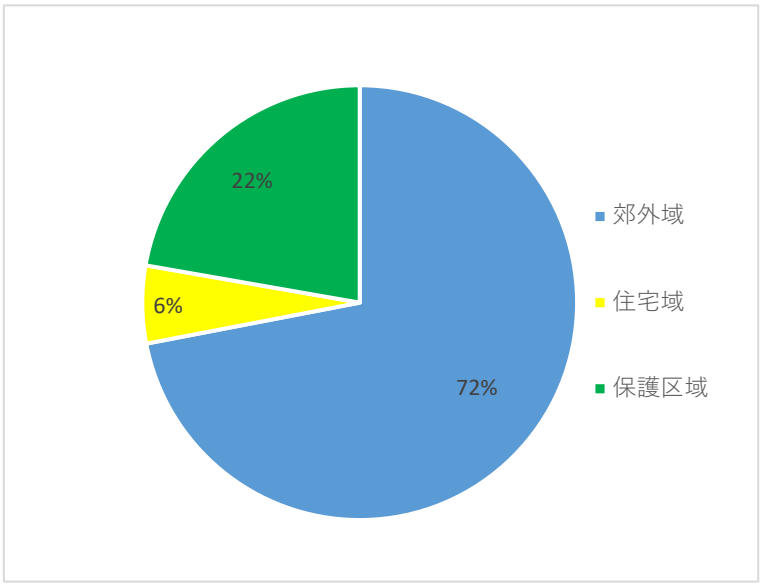

図 8. 釧路町・標茶町・浜中町・厚岸町における全報告件数の生息環境ごとの分類

図 7，8 より、全体の約 4 分の 3 は郊外域での報告であったが、釧路湿原国立公園周辺と比較すると保護区域内での報告が多い。

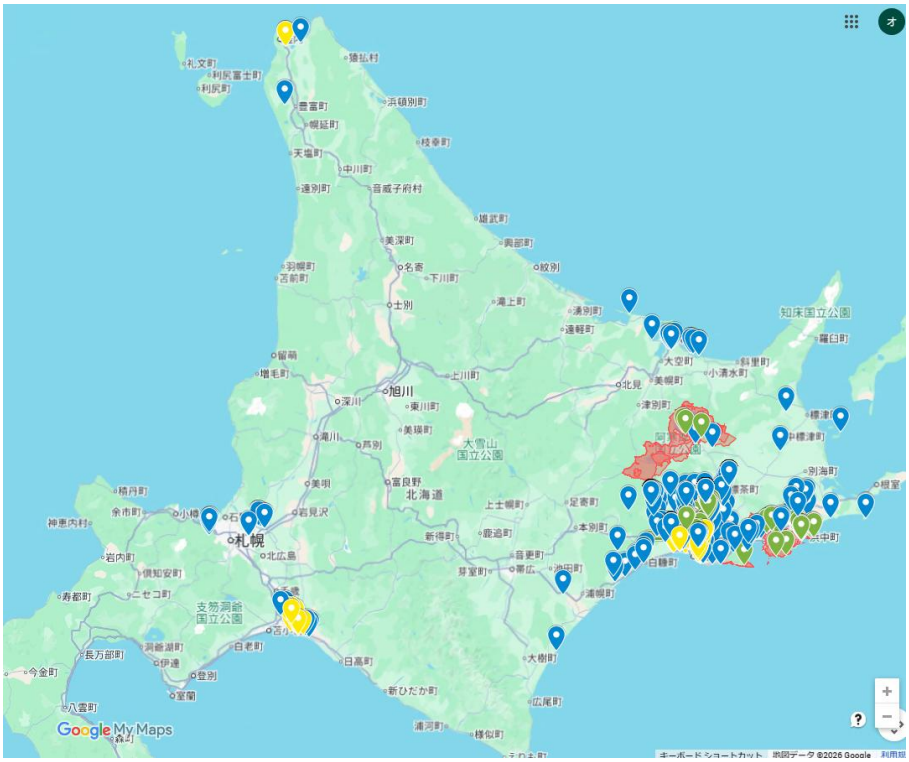

図 9. 2026 年度北海道全域におけるオオジシギ生息確認マップ

（青：郊外、黄：住宅、緑：保護区域の報告箇所を、赤レイヤは国立・国定公園エリアを指す）

道東に限らず稚内や札幌などでも生息が確認された。（図 9）

4. 考察

4.1. 時期別報告件数の推移と市民の動向との関連性

本調査における時期別の報告件数は、4 月下旬から増加し始め、5 月にピークに達した後、6 月に入ると減少に転じるという推移を示した。この報告件数の変動は、オオジシギの特異な繁殖生態を明確に反映していると考えられる。また、晴天時や祝休日での報告件数が多かったことから、市民が活動しやすい気候、時間帯、曜日で報告があったことがわかる。

浦野[*4]の生態研究によれば、オーストラリアから北海道へ飛来したオオジシギは、5 月に繁殖期のピークを迎え、オスが上空から急降下しながら尾羽で「ズビーヤク」という大きな音を立てる「ディスプレイフライト（求愛飛翔）」を頻繁に行う。本調査で 5 月に報告件数が急増したのは、この派手なディスプレイフライトによって市民調査員からの発見率が極めて高くなったためであると推測される。

一方で、6 月の報告件数の減少は、地域から個体が渡り去ったことを意味するものではない。浦野[*4]が指摘するように、6 月以降は交尾を終えたメスが草地に潜んで抱卵・育雛期に入るため、鳴き声や飛翔行動が極端に減少し、目視での確認が非常に困難になる。

すなわち、今回の市民調査で得られた時期別データの推移は、市民の動向と、オオジシギを発見しやすい「求愛期」から発見しにくい「抱卵・育雛期」への行動パターンの移行を捉えたものであり、市民参加型調査の特性をよく表しているといえる。

4.2. オオジシギの生息状況と技術委員会での評価

886 件の報告データと分析結果を当センター技術委員会で検証した。

マップが示す結果は、オオジシギが住宅域と保護区域の緩衝帯（バッファゾーン）に位置づけられる郊外域が、オオジシギにとって重要な区域であるのではと検討することができる。オオジシギの生息域が人々の生活圏と重複していることを知ることによって、オオジシギとの共生を考えることができる。また、市民が普段よく利用する生活道路や居住地の近くでの報告件数が多かったことから、市民の動向が調査結果に影響していることがわかった。

環境省のレッドリストにおいて準絶滅危惧に指定されているオオジシギの減少要因として、『釧路市立博物館報 No.433』[*5] では農地の大規模化・集約化や湿地の開発・転換による生息環境の喪失が指摘されている。本調査で得られた分布マップ（図 3、図 4）においても、かつては生息していたであろうエリアにおいて報告が見られない空白地帯が存在する。市民参加型調査の特性上、これらの空白地帯が必ずしもオオジシギの不在を意味するとは限らない点には留意が必要である。市民調査員は主に通勤路や生活圏内で観察を行うことが多いため、アクセスしにくい地域や生活圏から外れた場所が、単に「人が行かなかったための空白」となっている可能性も十分に考えられる。

したがって、今回は在データのみ調査したが、環境変化による真の生息不在地なのか、単なる調査未実施エリアなのか、不在データも調査することを今後検討する。次回の調査に向けては、技術委員や専門家でラインセンサスを実施するなど、市民と専門家がより緻密に連携する調査体制の構築を検討する必要がある。

4.3. 市民参加型調査の成果

今回、初の市民調査であったにも関わらず、事前申込数を大きく上回る市民の参加と 800 件を超えるデータが集まったことは、普及啓発事業として大きな成果があったと考えられる。「毎年自宅の庭にきているが、本調査に参加しなければこの鳥の希少性について特に意識したことがなかった。」という声や、市民から多く寄せられた電柱や建造物に止まっている写真から、日常生活に身近な鳥の生態や生息危機について、市民が知る機会の提供ができたと考えられる。



図 10. 街灯にとまるオオジシギ



図 11. ディスプレイフライトをするオオジシギ

5. 今後の課題と展望

本プロジェクトを通じて得られた成果を踏まえ、今後は以下の点に取り組む。

（1） 姉妹湿地連携の深化

11 月末に実施するオーストラリアの技術者との意見交換において、本市民調査の結果を共有し、オーストラリア側が求める情報についてヒアリングを行い次年度の調査内容の検討に繋げる。今後は、越冬地であるハンター河口湿地と繁殖地である釧路地方というフライウェイの両端をつなぐ保全活動の連携をさらに強固にしていく。

（2） 調査結果の地域への還元と次年度への継続

単年度の調査にとどめず、経年変化を追うことが重要である。来年 4 月に開催予定の市民説明会を通じて、参加者や地域住民に今年の調査結果を還元するとともに、次年度の調査への参加を呼びかけ、継続的なモニタリング体制を確立する。より普及啓発の効果をあげるため、説明会開催地は構成市町村 6 自治体で時期別にそれぞれ実施することを検討する。

（3） 調査データの保護施策への活用

得られた基礎データを環境省や自治体への提供し、具体的な保全アクションへ繋げていく。

（4） 調査フォームの検討

フォームにおいて、「送信完了」画面が入力画面と同一下部に位置したため、データを確実に送信できたのかわかりづらく、重複して何回もデータを送信する調査員が相次いだため、「送信完了」画面を入力画面と別に設けるよう改善を検討する。また、入力時に調査員の個人情報等を都度入力しないといけないことが煩わしいという意見があったため、一度入力した記録がある調査員の入力情報を記憶し自動で入力できるような仕様も併せて検討する。

6. 謝辞

本調査の実施にあたり、お忙しい中、熱心に観察・報告を行っていただいた調査従事者の皆様に深く感謝申し上げる。また、事前説明会や技術委員会でのご指導、釧路市立博物館や日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟釧路支部の皆様のご協力、さらにはオーストラリア姉妹湿地関係機関の方々のご協力に心より御礼申し上げる。

参考文献

*1「オオジシギ Gallinago hardwickii の渡り経路と越冬地の解明」日本鳥学会誌. Ueta, M., et al.

*2『環境省第 5 次レッドリスト（鳥類）』.

*3 The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-1.

*4「北海道におけるオオジシギ Gallinago hardwickii の繁殖生態と生息環境」『日本鳥学会誌』, 38(2), 71-85. 浦野栄一郎.

*5「釧路湿原南部地域におけるオオジシギの生息状況について」『釧路市立博物館報』, No. 433 黒澤　信道、貞國利夫.